第一回　「港町ブリストルで学ぶ」

岡部　芳彦

イギリスのブリストル大学に visiting research fellow として赴任してから３か月が経ちました。このコラムでは研究活動や港町ブリストルでの生活についてざっくばらんに書かせていただきます。在学生やこれから神戸学院大学で学ぼうという皆さんのご参考になれば幸いです。

神戸学院大学には教員の「教授能力の向上及び研究の推進」を目的とした海外研究員制度があります。海外での最新の研究動向を取り入れるとともに、その経験を学生の皆さんにお伝えして、グローバル化する社会や就職活動などに生かしてもらうことがその狙いの一つです。

ハットン教授と Highbury Vaults パブにてランチ

ブリストル大学は日本ではさほど知られていませんが、ウィンストン・チャーチル首相が学長を務めたことがあり、最近のイギリス大学ランキングでは10位前後とイギリスを代表する大学の一つです。僕の大学での受け入れ先は歴史学科、受け入れ教員は魔女・魔術・ドルイド・シャーマニズムの歴史の世界的権威ロナルド・ハットン教授です。僕は経済史・経営史が専門で何の関係もありませんし、魔女・魔術が専門と聞くと何やら妖しいイメージを持たれる人もいるかもしれません。しかし、ハットン教授はそれに歴史学的なさまざまな事例に基づいてメスを入れ、現代の異教主義にどのような影響があるのかを明らかにされています。テレビ出演も非常に多く、アメリカのテレビ局ナショナル・ジオグラフィック・チャンネルでは番組ナビゲーターを務め、日本のバラエティー番組にもコメントしたことがあるそうなので、ご覧になった方もおられるかもしれません。先日ハットン先生の一般市民を対象とした講演会を聴講したのですが、司会者から「歴史学のスーパースター」と紹介され、平日にもかかわらず、講演会場は満員の盛況ぶり。しかもお話がうまく、15 分に 1 度ぐらいは笑いをとります。またファッションも典型的なイギリスの教授といった感じです。高い水準の研究を、多くの人に楽しんでもらいながら伝える「学問のホスピタリティ」を感じました。ハットン先生の姿勢は、僕の講義や講演、また研究活動にも多いに生かせると思いました。

着任した 9 月は有り難いことに毎日のように学部教員がランチのアポを入れてくれてイギリス帝国史、ブリストルの海運史、ハンガリーでのホロコースト（第 2 次世界大戦中のユダヤ人迫害）の歴史など多分野の話を個人的にきけるのは研究者としてヒントになることが多く有益です。研究室をいただいた建物は少なくとも築 200 年は経っているそうです。

10 月に学期がはじまり、教員・大学院生向けのセミナーに毎週火曜日に参加しています。

他大学の第一線の教授陣をはじめ、若手研究者も様々な時代やテーマで研究発表するので非常に勉強になります。4 時 15 分から 1 時間で発表が終わるとアフターセッションはワインを片手に議論を続けます。先生方も僕の専門に近い研究をしている若手研究者を紹介してくれます。先日毎日新聞に、ノーベル医学生理学賞を山中伸弥・京都大学教授と共同受賞されたケンブリッジ大学のジョン・ガードン教授の研究室では、ティータイムが交流と研究の議論を兼ねた大切な時間だったと書かれていましたが、本当にそのとおりで、このワインパーティーを通じて世界水準の研究に触れることができます。

自分の研究については週の多くの時間を Bristol Record Office（ブリストル公文書館）で過ごします。ここでは専門の検認遺産目録を調査しています。少し検認遺産目録について説明させていただくと、昔イギリスでは誰かが死去するとその身の回りの品々のリストを作りその一部を教会に寄付しました。そのリストは遺産目録と呼ばれ、それを見れば当時の人々がどのような生活をしていたかが分かります。テレビ等で歴史上の偉人について紹介されても、その人や当時の一般の人々がどのような毎日を送っていたのかは実は知られていないことが多いです。一昨日見たのは 1763 年の原本ですが、包みを開けると封蝋（ロウで教会の印章が押されています）と紙のかけらがパラパラと飛び散りハラハラします。昨日はさらに 80 年前の 1684 年のものを見ましたが意外に保存状態がいい上に字がきれいなので読みやすかったりします。こういった意外性が歴史研究の面白いところです。

ブリストル公文書館にて。写真右上が 1685 年の教会文書の束、左下が 1684 年の遺産目録原本。

さて、今回はブリストル大学を中心につづりましたが、次回はイギリスで活躍する現役神戸学院生や日常生活について書かせてもらおうと思っていますので、またよろしければ神戸学院大学経済学部ホームページをご訪問いただければ幸いです。

最後に、写真のハットン教授とランチをしている場所は、大学の裏の Highbury Vaults という 1800 年頃からあるパブで、昔の処刑場の中で囚人が最後の食事をとる場所だったそうです。イギリスの歴史の奥深さを感じるとともに、ちょっとドキドキしながらのランチでした。